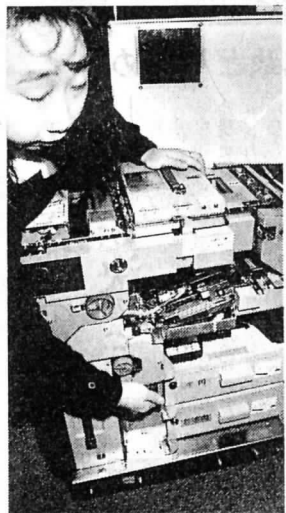


# 二七札識別 思わぬ死角



二七札が使われたが、換金前に両ル  
フザーが鳴った虎で  
替機=東マシ  
機=東マシ

大阪、京都、滋賀三府県の二七一万円札事件。二七札は、ハイテク技術を駆使した両替機や券売機をまんまと素通りした。従来の二七札事件が人間の目をだましたのに対し、今回は機械の目をすり抜けた初めてのケース。死角はどこにあったのか。

# 古札・汚れ配慮が裏目

色も模様は光センサーが読み取る。情報処理の専門家によると、色を読み取るには光をあて、その反射光を赤、緑、青の三種類のフィルターに通す。フィルターを通過する光の量から色を識別する。紙幣のすかしも光センサーがチェックする。すかしは、光を当てると、通過する光の量と反射する量が一定の割合になるように作られている。この割合を確かめるわけだ。

# 「許容範囲」ですり抜け

## 時間やコストも壁に

大手の東洋インキ製造(東洋インキ製造)という。紙幣用インキは大蔵省が原料を買い入れ、酸化鉄の含有量などを調整しているという。一万円札の磁気の強さは、機械も知らないはずだが、同様の磁気インキは小切手やキャッシュカード、地下鉄の切符などに広く使われている。第一の死角ともいえる。しかも、読み取り装置は、古くなり磁気の弱くなった真鍮でも受け付けなければならぬ。磁気の識別にも「許容範囲」がある。酸化鉄がささ入っていても、真鍮と判定が違っていても、真鍮と判定してしまうこともありそう。

疑い続け体温計博士  
なせ、プーマンは戻ってこないのか、別はタマゴ型なのか。「身の回りの小さな疑問を見逃さぬ性格」という大阪経済大助教授(数理学)の西山豊さんが「電子体温計の」研究(法研社)を出版した。

歩み続け防災を考察  
三月末までは防災科学資料センター。自然災害に関するデータベース作りが主な仕事だったが、「研究にも力を入れたい」と、増員や改組を大学側に働きかけた。毎朝、大阪市内の自宅から最寄りの駅を素通りし、繁華街や地下街をさらさら。四十分かけて、わざと遠方の駅まで歩く。「都市災害を研究しているのに、都市を知らないでは話になりません。毎日変わって話になりますから」考えたい。

体温計は実に六十一番目の「疑問」。六年前、かぜが治ったのに、表示は「微熱あり」。調べたら、一分間の測定で十分時間計った体温を測る方式。時間ばかりかからないが、誤差を防げないことが分かった。

「体温計は実に六十一番目の「疑問」。六年前、かぜが治ったのに、表示は「微熱あり」。調べたら、一分間の測定で十分時間計った体温を測る方式。時間ばかりかからないが、誤差を防げないことが分かった。」

「体温計は実に六十一番目の「疑問」。六年前、かぜが治ったのに、表示は「微熱あり」。調べたら、一分間の測定で十分時間計った体温を測る方式。時間ばかりかからないが、誤差を防げないことが分かった。」

「体温計は実に六十一番目の「疑問」。六年前、かぜが治ったのに、表示は「微熱あり」。調べたら、一分間の測定で十分時間計った体温を測る方式。時間ばかりかからないが、誤差を防げないことが分かった。」